

嬉望

第2号

令和3年12月24日
兵庫教育大学
教職大学院
学校経営コース
編集部(国本・満石)

「嬉望」は、本学加東キャンパスが嬉野台地区にあることと、「希望」とをかけた造語です。



【兵庫教育大学マスコットキャラクター】

理論と実践の融合

大学での「理論」と「実践」との融合を確立させるべく、学校経営コース二年生は八月、九月よりインターシップ。そして、希望者による佐賀県嬉野市教育委員会への約一週間の視察見学も行われました。また、一年生は先進校視察、フィールドワークに参加しました。

嬉野市教育行政体験

佐賀県 嬉野市教育委員会

石橋 千恵

兵庫県から車で約六百五十km、通ったことのあるけれど目的地にしたことがない距離的にも心理的にも遠い佐賀県嬉野市。今回のインターシップは家庭を一週間あけるというチャレンジでもありました。そんな個人的な理由もありましたが、思い切って佐賀

県嬉野市行きを決めました。そして、始まったインターシップは、予想以上に最高の経験となり、「体験する」を選んだ自分を褒めてあげたいと思います。

杉崎士郎教育長の傍でその行動や考え、マインドを知ること、私は教育長と嬉野市の教育の大ファンになってしまいました。

一番驚いたのは、教育長のフットワークの軽さと教員との心理的垣根の低さでした。同行した小学校訪問では、若い教員へ気軽に声をかけられている姿をお見かけしました。声をかけられた教員はいつものことといったよう。こんなふう

に声をかけながら、嬉野市内の教員を全員把握されており、彼らの十年後のキャリアを思い描いておられました。そして、それは嬉野市内の教育にとどまらず、佐賀県西部教育事務所管内九市町にある教育とともに良くすることにつながっており、まさにBIG BOSSそのものでした。

「教育長には先見の明がある」と、ともに働く方から出た言葉は、教育長が超能力を持っているからでも、タイムマシンで未来に行くことができるからではなく、先を見据え、学び続けておられることに他なりません。そこから出たアイデアは泉のごとく湧き出る嬉野温泉のようでした。

教育行政について全く分からない私を嬉野温泉のように温かく迎え入れてくださった嬉野市教育委員会の方々に厚く御礼申し上げます。来年秋には嬉野温泉駅に新幹線が停まる。心理的、時間的にもぐっと近くなる佐賀県嬉野市。これからも嬉野市の教育に目が離せません。

ところで、一週間主婦のいなかった我が家というところ、中学生の娘たちのおかげで何事もなく日常が過ぎていったようです。子どもの成長にあって、「何もしない」教育効果は絶大であると感じました。

インターシップ報告

鳥取県立鳥取中央育英高等学校

田中 晁宏

八月二十三日から十月十五日までの約二か月にわたり、現任校である鳥取県立鳥取中央育英高等学校でインターシップを行いました。管理職の皆様には、コロナ禍の影響で通常業務に加えて業務量が増加しているにもかかわらず、親身となって職能成長をサポートしていただき、日常の業務観察や質問、校長シャドウイング、助言指導、時に管理職務のレクチャーをしていただきました。これまでの勤務では感じられなかった学校運営の一端を知ることができ、俯瞰的な視点で学校を捉えることができました。特に、コロナ対応で想像絶する激務の姿には管理職としての力量が問われることを学びました。

ことよって、教職員との信頼関係が築け、仕事の依頼もしやすくなることを教わりました。自分にとって克服すべき校長として重要な資質は、次の二点に集約することができます。一点目は、何を求められているのか的確に判断し、自分の考えを返すこと、二点目はミスがあれば謝る、わからなければ聴く、迷ったら時間を置く、などの高潔さを持つことです。

校長の姿からは、国や県の状況を把握されるなど広く情報を集められ、余裕を持ち適切な判断をされること、不適切な事柄に関してはいきなり指摘され信念を持った経営をされることなど、学校運営の基本的な姿勢を学ぶことができました。また「傾聴する」

教職員の皆さんには、質問紙調査やインタビュー調査、授業参観や授業研究のお願いに真摯に応じていただき、研究を進めることができました。特に、インタビューでは、生徒に関する内容を中心にお答えいただき、学校をより良くしたいとの熱い思いを聞くことができましたし、同時に学校改善プランとしてしっかりと形にしたいと思いを強くしました。

今回の経験を基に、残された大学院での学びにいかし、鳥取県の教育に還元していきたいと思えます。助言指導をいただいた、多くの関係者の皆さまに心より感謝申し上げます。



10/2 インターンシップ
中間報告兵庫会場の様子

山口県立光高等学校

徳永 志保

八月三十日（月）から十月二十九日（金）までの九週間、現任校である山口県立光高等学校でインターンシップを行いました。折しも、新型コロナウイルス感染症の第五波がピークを迎えていたこともあり、学校全体が感染予防対策に追われている中での開始となりました。

校長は、毎日の振り返りの時だけでなく、様々な機会を捉えて校長としてのビジョンや想い、管理職としての立ち居振る舞いを丁寧にご教示くださいました。また、全日制の教頭からは、地域探究の在り方に関する提案等、示唆に富むご意見をうかがうことができました。中学校配布用チラシやポスターを作成する機会も提供していただきましたが、作成を通じて生徒の想いに触れ、学校のあるべき姿を考える契機となりました。さ

らに、定時制の教頭からは、教頭の日常業務について丁寧なご指導を受けました。これらの管理職の業務観察等とおして、未だ十分に把握できていなかった現任校の特色や課題に気づくことができ、まさに目から鱗が落ちる体験を重ねることとなりました。

私にとって幸運だったのは、

現任校には元校長が三名ほど勤務しており、全員にインタビューすることが叶った点です。重大危機に対応した元校長からはクライシスマネジメントの実践について、高校コミュニティ・スクール最初期導入校の元校長からは、現任校のコミュニティ・スクールの課題について、それぞれご助言をいただきました。

また、保護者や地域住民及び学校運営協議会委員に話をうかがったり、山口県教育委員会及び光市教育委員会、市内中学校を訪問したりするなど、一教諭としては実施が難しいであろう活動を実習生という立場を最大限に活用して行うことができました。

これらの得がたい体験は、管理職をはじめとした教職員の皆様方の細やかな心配りがあったからこそに他なりません。現任校の皆様が成果を還元できるように努力すると

もに、このような貴重な学びの機会を与えてくださった大学院の先生方及び山口県教育委員会に感謝申し上げます。



学校紹介ポスター
(徳永さん作成)

フィールドワーク

神戸市立葺合高校WwL事業

福重 清数

十月十五日（金）WwLコンソーシアム構築支援事業運営委員会に参加しました。WwLは二〇一九年度からの高校生を対象とした、次世代のイノベータータイプでグローバルな人材を育成するための文部科学省事業であり、葺合高校は全国十校の拠点校の一つに選ばれました。浅野特任教授、アシックス、神戸新聞、市長室、市教委、中学校校長が運営指導委員として携わっておられ、行政側のネットワークを市教委がうまくつないでいるモデルケースだと思えます。今年が最終年度ということで、これまでの活動と来年度以降の方針について議論が交わさ

れました。

今年の目玉であるスタンフォード大学のオンライン講座「スタンフォード e-Ko-beプログラム」は合計十二回で構成され、名門大学の講義に市立の五校から代表二十四名が集い、参加生徒は大きな刺激を受け続けています。コロナ禍においてはオンライン主体にならざるを得なかったものの、数多くの国際セミナーや会議、発表会等に参加した生徒は、WwLを通して多種多様な価値観に触れ、視野の広がりを実感するとともに、クリティカルシンキングといった深い思考力を身につけたそうです。様々な発表の機会を通して、TEDにも引けを取らないような表現力を会得し、「私たちには『学ぶ責任』がある」と生徒が口にしたことは印象的で、学びに対する生徒の意識改革を誘発した一例ともいえます。「本物・「ライブ」に触れる実体験が主体的・対話的で深い学びにつながる効果的なアプローチになるのだと再認識しました。

以上のように、個性あふれる学校がタッグを組み、他の教育機関との連携を深めることによって、教育の幅が大きく広がる可能性を感じました。行政、企業、大学、メディア

を巻き込んだコンソーシアムがしっかりと機能しており、組織経営について多くを学ぶ機会になりました。

鳥取県学力向上推進プロジェクトチーム会議

加藤 淳一

十月十三日に地元鳥取県でのフィールドワークに参加してきました。これは本学大学院浅野特任教授が外部アドバイザーを務める学力向上推進プロジェクトチーム会議の傍聴という形での参加でした。この会議は平成三十年から継続実施しており、外部アドバイザーとしては浅野教授の他、文部科学省総合教育政策局長補佐、環太平洋大学次世代教育学部長の参加がありました。

今年度の鳥取県の全国学力・学習状況調査の結果やその活用について、委員の方（町長、塾関係者、小・中学校長、市・町教育長、県教育次長）から多くの意見が出されました。調査結果の数字のみで判断するのではなく、回答の傾向、授業との関連、全国の推移、教育委員会の関わり、学級経営の重要性など鳥取県の児童生徒の学力向上に必要な様々な視点での意見交換でした。

また、鳥取県では県独自の調査も実施しており、今年度の結果についての分析、報告だけではなく、継続実施によるデータの有効的な活用方法や高校入試の在り方などに対する意見交換も行われていました。

会議のまとめでも出ていましたが、児童生徒の学力向上を考える際に学校だけではなく、県、市町、地域と如何に連携して考えることができるのかが今後更に重要になってくると感じました。

この会議は小・中学校の児童生徒が対象となっているのですが、私自身、高校所属として調査結果だけではなく推進会議の内容を知ることほとても貴重な経験となりました。多様な視点からの意見交換を基にして「チーム鳥取」で子どもたちの未来に輝きを与えられるようにしっかりと学びを深めていきたいと思いました。

を深めるために、小野市教育委員会と小野市立河合中学校を視察しました。

小野市は、二〇〇四年（平成十六年）から小中連携教育に取り組み、二〇一六年（平成二十八年）から市内全校区が小中一貫教育校となっています。その中で、小中学校統一の独自検定である「おの検定」を実施し、基礎学力の定着を図っています。また、教育委員会は、市長部局と連携し、脳科学の知見に基づく子育ての啓発を行っています。十六か年のキャリア形成を意識し、脳の成長に応じた「夢と希望の教育」を展開し、基本的な生活習慣の確立や「生きる力」の基礎の育成を目指し、家庭教育を支援しています。

河合小学校・河合中学校は、五・四制を取り入れている珍しい実践をされています。小学校六年生の教室は、中学校にあります。六年生の児童が小学校に行くことはほとんどありません。一見すると、小学校が五年間、中学校が四年間になっただけではないかと思われそうですが、そうではありません。六年生の教室が中学校にあることで、小学校・中学校間のヒト・モノ・コト・情報の流れがスムーズになっています。それによって特色

ある取組がどんどん行われており、とても興味深かったです。

今は、地域連携、小中一貫教育、教科担任制、学力向上など教育の諸課題について文献や論文を読んだり、先進地を視察したりしながら、視野を広げ知見を深めています。今後は、課題を絞りつつ多角的に事象を捉えながら研究を進めて参ります。

横浜市教育委員会 横浜市立寺尾中学校

福永 昌史

中堅教員の人材育成のあり方について、十一月十七日（水）に横浜市教育委員会と横浜市立寺尾中学校を視察させていただきました。横浜市は我が国の市区町村で最大の人口規模を誇ります。大量採用の一方、中堅世代の他県への流出も多く、若手や中堅教員の育成が他の自治体以上に大きな課題となっています。この難題に対応するため、横浜市では平成十八年度に各校で世代を縦割りにしたメンターチームを核にした人材育成の仕組みを立ち上げました。今回の視察では、市教委において取組の概要を、寺尾中学校において実際のメンターチームの研修の様子を視察させていた

いただきました。

この視察において、①横浜市人材育成指標に基づいた各自の自己評価がチャートとして示され、「強み」「弱み」が見える化されていること、②各年次研修において約七割の研修内容を選択履修とし、各自の状況に応じた研修ができること、③年次研修で中堅教員が学んだりリーダーシップやファシリテーション技術を、自校でメンターとして発揮する仕組み（研修と実践の一体化）ができていること。この三点について大きな示唆を得ました。

寺尾中学校では、五、六人の教員が十グループのチームに分かれ定期的に研修を行っています。この日私が参加したグループでは、初めて学級担任となった若手教員からの「学級内でリーダーを育成するための手立て」や「二学期末個人懇談で何を話せば良いのか」という悩みについて話が進みました。通常の研修ではあまり取り上げられないが若手に取っては悩み深い、まさに、かゆいところに手が届く、研修内容であり、中堅教員の確かなファシリテートにより若手教員の表情がみるみるうちに明るくなっているのがわかりました。なによりも

横浜市の掲げる「わたしを育てる、わたしが育てる」が、画餅でなく学校に日常の姿として根付いている様子においてに刺激を受けた一日でした。

京都市立総合支援学校 職業学科三校

後藤 聡子

京都市には白河・東山・鳴滝の三校の職業学科の総合支援学校があり、卒業後の進路として企業就労を目指し、社会人として自ら学び、働ながら生活しようとする生徒の育成を目指しています。各校の専門教科は、白河は家政・農業・工業といった物づくり、東山は福祉を中心とした地域協働活動、鳴滝はクリーニン・グ・メンテナンス・福祉等のサービスの提供と特色を活かしています。各校の特色を活かしながら、ないものをリソース活用するというプラットフォーム構想を取り入れられているところに興味を持ち、先進校視察として三校に訪問させていただきました。

それぞれの学校では、校長先生、教頭先生、主幹教諭の先生方からお話をきくことができました。また、学校見学では授業見学や喫茶サービスでの接客など生徒たちと直接関わることができました。学

先進校視察

小野市教育委員会

小野市立河合中学校

山本 健作

小野市で取り組まれている小中一貫教育についての理解

校の施設には専門的な機材があり、社会で通用する経験ができることに驚きましたが、専門的な技術を育てているのではなく、先生方は「どのような場面で、何が、どのように変容したか」という内面的な気づきを大事にされ、記録や活動後の振り返りを重要にされていることが分かりました。また、地域協働活動を通して、社会との接点から課題を見つけコミュニケーション能力を育成していくことは、自己肯定感を育て将来職業人として主体的に生きていくために必要な取り組みだと感じました。

今回の訪問を通して、先進校の様々な取り組みを参考にし、現任校の取り組みや課題を整理し、研究を深めていきたいと考えています。

南あわじ市視察

南あわじ市立北阿万小学校

久下 泰史

視察当日は、午前八時に学校を訪問し、まず管理職から学校のランドデザインについての説明を聞きました。その後、二班に分かれ授業・生活の様子を観察しました。北阿万小学校は、教室にICT機器が豊富で、全児童に一人

一台のタブレットを配布し、大型モニターや電子黒板などが各教室に設置されており、とても恵まれた環境に驚かされました。それに伴い、校内研修やOJTを活用してICT機器を活用した授業の向上に励まれていました。

また、市のコアプログラムにより伝統芸能である人形浄瑠璃の学習を中学三年生まで継続して行うなど、カリキュラムの中核に地域の伝統を置いたマネジメントを実行されていました。

管理職が教師の自主性を大切にされる理念が、教師や児童にも伝わっている様子が随所に見られ、勉強になりました。午後から管理職・主幹教諭のヒアリングを実施し、その後のフィードバックで院生が課題に感じる部分や学校の強みの部分について、意見交換を行いました。

院生にとっては、第三者評価を体験できたことや管理職・市の指導主事と交流ができたことは、大変貴重な経験になりました。また、一日目終了後に行われた南あわじ市の教育長や指導主事との懇親会において、市の内情を聞ける場も設けていただき、中身の濃い二日間となりました。この活動を通して、管理職

としての知見が広がったとともに、国立淡路青少年交流の家での合宿を通して院生間の絆もより深まったことは、私にとつて忘れられない体験となりました。

南あわじ市立広田中学校

高越 美智子

私が二日目に訪れた広田中学校では、最初に校長・教頭からの学校概要の説明を受け、指導主事から地域の特徴などを教えていただきました。その後、授業見学・管理職や主幹教諭への聞き取り・給食喫食・掃除見学を行い、最後にフィードバックを行いました。

広田中学校の生徒たちは、授業前に着席し、また授業中も静かに落ち着いて学習しており、基本的な学習習慣がしっかりと身につけていることがよく分かりました。また、一日目に訪れた神代小学校同様に、電子黒板やタブレットが従前からの教材教具のように活用され、生徒たちはサクサクと調べ学習に取り組んでいました。清潔感あふれる校舎からは、日々熱心に掃除に取り組んでいる様子が伺えました。この日は「デザイン思考で考える富士通 SDS プロラム」の実施日で、二年生五十人がオンラインで二社の企

業や他市の中学生と積極的に交流する様子も参観させていただきました。大学の先生方のアドバイスをいただきながら、校種の異なる院生同士で感想や意見を出し合う実施研修は、一人では見えていなかった多くの気づきを得るとても貴重な経験となりました。この視察での経験を活かし、学校を多面的に分析する力や改善案を適切に伝える力などを高めていきたいと思えます。



11/11 南あわじ市視察
神代小学校での調査の様子

兵庫県立淡路三原高等学校

塩 晃

高等学校の学習指導要領が令和四年度より完全実施というところで、現在の高等学校の授業の様子や、ICTの活用、学校の組織の状況等に個人的関心もあり、非常に楽しみにして訪問当日を迎えました。現地に着いてすぐに正門前で登校の様子から視察を開始しましたが、どの生徒も目

を合わせて軽く会釈をするなどさわやかな挨拶をしており、地域の温かい支援のもと素朴で人当たりがよく素直な生徒が育っていることが伺えました。

始業前の朝学習では、各学年で英語科のブロックテストや国語科のワークなど工夫を凝らした取り組みがなされており、生徒たちは落ち着いて黙々と課題に取り組み姿が見られました。また、授業では、積極的にICTが活用されており、多くの授業で見やすく工夫された教材提示がなされていました。

管理職や主幹教諭との聞き取りでは、学校の現状とそれに対する学校経営の思いや実際の取組について管理職から直接話を聞いたり、各教科の先進的な取り組みや南あわじ市と連携した総合的な探求の学習の取組についてその熱い思いを主幹教諭から聞き取りたりすることができました。このように淡路三原高等学校の生徒一人ひとりの個性を伸ばすための教員の丁寧な指導や、授業改善の取組、豊富な地域資源を活用した地域連携活動を実際に見たり、知ったりすることができたことは自分自身にとって非常に大きな学びとなりました。